

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 組織をつなぐFD&SDであるために   |
| Author(s)    | 林, 透  |
| Citation     | CGEIアニュアルレポート 2011: 3-7   |
| Issue Date   | 2012-07   |
| Type         | Research Paper  |
| Text version | publisher   |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/10119/10691">http://hdl.handle.net/10119/10691</a> |
| Rights       |   |
| Description  | . 活動報告 / Center Activities, (1) FD・SDの取組 / Faculty Development・Staff Development  |

&lt;報 告&gt;

## 組織をつなぐ FD&SD であるために

林 透 (大学院教育イニシアティブセンター特任准教授)

### Faculty Development and Staff Development for Joining the Organization

Toru HAYASHI

(Research Associate Professor, Center for Graduate Education Initiative)

**Abstract :** We introduce the main topics of FD/SD seminar in 2011. Although the necessity of FD and SD has become popular around Japanese universities, we have to regard Organizational Development as important points. Therefore, we try to expand FD/SD activities to Local areas as well as JAIST. We would like to produce a chance as ‘University Co-creation’ with faculties, staffs and students, and give a educational support for each school based on three Policies; Admission Policy, Curriculum Policy and Diploma Policy.

[キーワード : 全学 FD・SD, 研究科 FD, 組織開発 (Organizational Development), 大学共創]

#### 1 はじめに

大学院教育イニシアティブセンターが全学 FD・SD セミナーを企画担当するようになって 2 年目を終えたが、2011 年度には前年度同様、年間 3 回のセミナーを開催した。具体的な実施計画と実績は下表のとおりであり、2011 年 1 月公表の『グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～ (答申)』の影響を受けて、米国の Qualifying Exam や大学教員志望者のためのプレ FD 実践など、大学院 FD として直面する課題を強く意識した構成となった。グループワークも適宜取り入れることにより、その効果を改めて確認する結果となった。従来との違いとしては、第 2 回の全学 FD・SD セミナーにおいて、テーマに則して、大学院生、特に博士後期課程の学生の積極的な参加を呼びかけ、多くの学生の参加を得ることができた。

| 実施計画   | 実 績  |
|--|--|
| <p><b>(1) 国際的通用性を備えた博士課程修了基準とは</b></p> <p>趣旨：米国での体験談をご紹介いただきながら、博士課程教育のあり方や博士学位が保証する能力について共通認識を図ることを目的とする。</p> | <p>○実施概要</p> <p>日時：平成 23 年 6 月 20 日 (金) 15:30-17:00</p> <p>場所：知識科学研究科講義棟・中講義室</p> <p><b>【基調講演】 15:30-16:30</b></p> <p>「大学改革再考～激変する時代の要請～<br/>ー私の半世紀にわたる教育・研究の体験を通してー」</p> <p>東京工業大学理事・慶應義塾大学名誉教授<br/>相磯 秀夫 先生</p> <p><b>【質疑応答】 16:30-17:00</b></p> |

|  |  |
|--|--|
| <p><b>(2) 大学院 FD と大学院生のための教育力育成</b></p> <p><b>力育成</b></p> <p>趣旨：学士課程教育とは違った大学院 FD に必要な観点や要素について考えるとともに、「大学院生のための教育実践講座」(京都大プレ FD) など、大学院生のための教育力育成の実践事例とその必要性について新たな知見を得ることを目的とする。</p> | <p>○実施概要</p> <p>日時：平成 23 年 10 月 14 日 (金) 15:30-17:00</p> <p>場所：知識科学研究科講義棟・中講義室</p> <p>【基調講演】15:30-16:30</p> <p>「大学院 FD と大学院生のための教育力育成」</p> <p>京都大学高等教育研究開発推進センター教授<br/>大塚 雄作 先生</p> <p>【質疑応答】16:30-17:00</p>   |
| <p><b>(3) 自律的学習のためのインストラクショナルデザイン</b></p> <p>趣旨：授業設計や学習者理解を経験則に頼るのではなく、科学的方法論を援用することによって、効果的な教授法や自律的な学習法を促進するインストラクショナルデザインの概念等について新たな知見を得ることを目的とする。</p>                               | <p>○実施概要</p> <p>日時：平成 24 年 1 月 23 日 (月) 15:30-17:00</p> <p>場所：知識科学研究科棟 5 階 コラボレーションルーム(2)</p> <p>【基調講演】15:30-16:15</p> <p>「自律的学習のためのインストラクショナルデザインとは ー学生学習目標 (Learning Goal) について考えるー」</p> <p>熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻教授<br/>鈴木 克明 先生</p> <p>【グループワーク&amp;質疑応答】16:15-17:00</p> <p>テーマ：「学生の学習目標 (Learning Goal) について考える」</p> |

全学 FD・SD セミナーは、研究科はもちろんのこと、特に研究科を超えた全学的な教育改善に貢献するものでなければならぬと考えている。そのため、これらの内容が大学構成員に情報共有されるような環境も不可欠であると考えており、本アニュアルレポートに詳細な内容と講演資料を掲載するとともに、速報版として、大学院教育イニシアティブセンターホームページのブログ欄(右図参照)及びニュースレターに情報掲載し、学内外に情報発信している。なお、今後はオンライン研修環境の整備を図り、一層の充実を図っていく作業を進めている。

**センターブログ** Blog

大学院教育 イニシアティブセンター

Center for Educational Innovation

知識科学研究科棟5階大学院教育イニシアティブセンターのブログです。活動レポートなどを中心に投稿をさせていただきます。

---

平成23年度第2回全学FD・SDセミナーが開催されました

2011年10月17日 18:47

10月14日(金)午後、平成23年度第2回全学FD・SDセミナーが開催された。今回は、京都大学高等教育研究開発推進センター 大塚雄作教授をお招きし、「大学院FDと大学院生のための教育力育成」と題して、ご講演をいただいた。

まず、2007年度大学院設置基準におけるFD義務化に言及しながら、自らの大学コンソーシアム京都での大学院FDをテーマとした分科会や文科省・設置審査における大学院教育を重視した指導を通じた経験から、大学院FDの重要性を指摘した。ただし、2008年度の大学院設置基準をFD義務化を受けて、FDが講演会や授業評価といった定型的に形で行われるようになっていく現状に触れながら、教務委員会、教授会等での教育改善の取組や教員同士の教育談話などの日常的行為こそFDに当たるのではないかと指摘した。

実質的なFDの共有に向けて、教育改善に関わる情報交換や情報交流の場を作り、日常レベルの教育改善活動をどのようにアカウントブルに表現することができるかということ共有していくことが大事だと説明した。このようなネットワークができれば、FD活動の評価自体も実質化するのではないかと期待を寄せた。

次に、京都大学でのプレFD (Preparing Future Faculty) の活動について紹介があった。京都大学では「自修自学」という校風から、FDそのものに否定的な態度を示す教員も多い中で、大学院生や大学院修了者を対象としたプレFDは受け入れられ、充実した展開を見せている。具体的には、「大学院生のための教育実践講座」「文学研究科プレFDプロジェクト」「サイエンス・コミュニケーター・プロジェクト」の取組が行われている。「大学院生のための教育実践講座」は2005年度からスタートした取組で、グループワークを中心としたBasicコースと模擬公開授業を取り入れたAdvancedコースがあり、この活動を通して、大学院生の自主的勉強会も生まれている。「文学研究科プロジェクト」は、大勢のオーバードクター (OD) を抱える文学研究科自身が企画実施した取組であり、ODが非常勤講師として担当した授業の検討会などを行うことで、貴重な研鑽の場を提供することとなっている。「サイエン

2012年4月

| 日  | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 1  | 2  | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  |
| 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 |    |    |    |    |    |

最近のエントリー

- 第17回レポートを公開しました。
- 第17回レポートを公開しました。
- 第16回レポートを公開しました。
- 第16回レポートを公開しました。
- 第16回レポートを公開しました。
- エントリー「30分セミナー『大学院教育の質保証と博士修了基準とは』」を公開しました。

月別アーカイブ

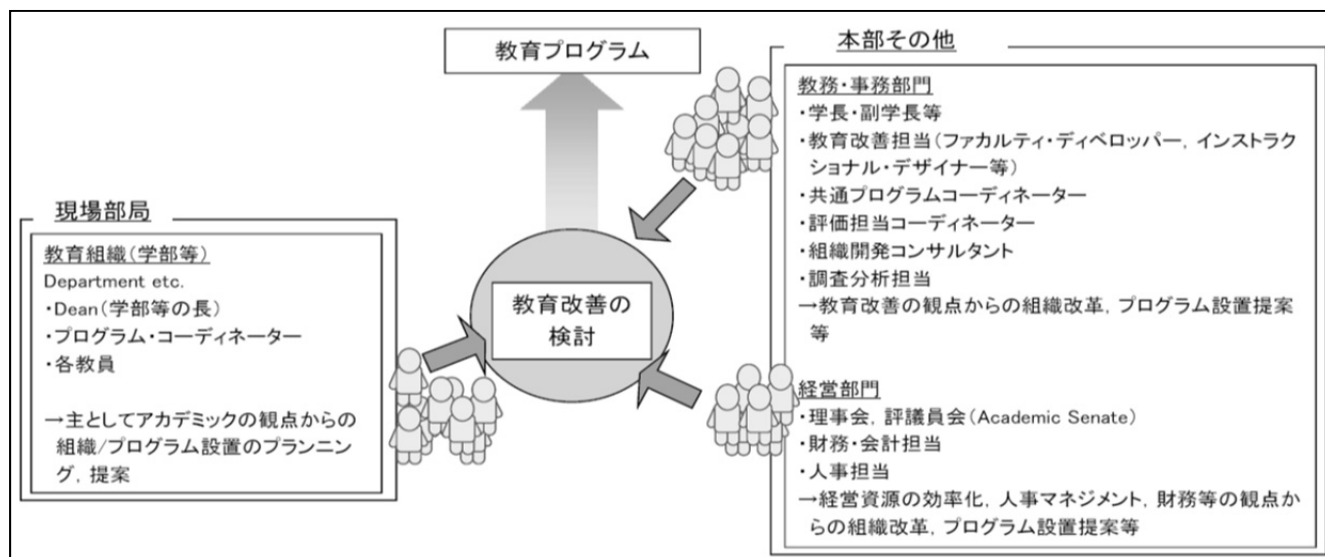
- 2012年4月(2)
- 2012年3月(3)
- 2012年2月(1)
- 2012年1月(5)
- 2011年12月(2)
- 2011年11月(1)
- 2011年10月(6)
- 2011年9月(2)
- 2011年8月(2)
- 2011年7月(2)
- 2011年6月(3)
- 2011年5月(2)
- 2011年4月(2)
- 2011年2月(7)
- 2011年1月(6)
- 2010年12月(1)

## 2 考察

### 2.1 FD・SD から OD (Organizational Development) へ

第2回の全学FD・SDセミナーで講演いただいた京都大の大塚教授は、2008年度の大学設置基準におけるFD義務化を受けて、FDが講演会や授業評価といった定型的に形で行われるようになっていく現状に触れながら、教務委員会、教授会等での教育改善の取組や教員同士の教育談義などの日常的行為こそFDに当たるのではないかと指摘したことについて、改めて足元を見つめなおす契機となったように思う。本学に当てはめれば、教育改革・改善WGという議論という場があり、ここでは全学FD・SDや研究科FDが毎回議論されているわけであり、その議論の結果をいかにインプリメンテーションしていくかこそ大きな課題なのだと感じた。そういう意味では、第3回の全学FD・SDセミナーにおけるグループワークにおいても、各研究科の教員がそれぞれのカリキュラムにおける「継続すべき良い点・見直すべき点」を列挙してグループごとで議論を深め、学生の学習目標を念頭においたカリキュラムを眺める観点を共有する機会を与えることとなった。

本学にとって一つの課題とすれば、2010年度に本センターが設置されたことを契機に、全学FDから全学FD・SDへと展開した成果が求められなければならないように感じている。2008年12月公表の中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』において、「FDの実施に当たって、多様な参加者へのきめ細かな配慮をする」ことが大切であり、「テーマに応じて、職員の積極的な参画を促す」と明記されている。全国的にも、組織的な教育改善は、教員と職員が一緒になって取り組んでいくというFD・SD併記の概念が一般的になっている。そのような中で、職員の積極的参加や積極的発言を促す環境づくりに更に力を注ぐ必要性があろう。下図は、中央教育審議会大学分科会大学教育部会で参考資料（中央教育審議会大学分科会大学教育部会 2012）として提示されていたものであるが、多様化する教育プログラムを支えていくには、教授者である教員だけでなく、各種支援を行う職員（専門職を含む）の存在が不可欠であることを強く認識すべきである。



大学院教育イニシアティブセンターでは、自大学を超えて、地域の大学との交流にも力を注いでおり、北陸3県（石川県、富山県・福井県）の国立4大学の教育系センターがチームを組んで、大学共創プロジェクトという取組に2011年度から着手している。そのプロジェクトでは、まさに、大学の組織力向上のために、教員と職員が一緒になって課題解決に当たる環境作りについて検討しているが、2011年12月上旬に金沢市内で開催した合同セミナーのパネルディスカッションでも教員と職員の日

## II. 活動報告

常対話が成立しているケースとそうでないケースが紹介され、大学間、組織間によって温度差のあることが感じられた。詳細は、別途報告書（『大学共創プロジェクト 2011 報告書』）を参照願いたい。

本学のように研究科 FD が機能している場合には、全学 FD・SD 活動の役割は、教員と職員、さらには学生をも含めた組織改善・組織開発（Organizational Development）に重きを置いたものであることが必要であるように感じる。

### 2.2 大学コンソーシアム石川との共催イベントを通して

2011 年度に大学院教育イニシアティブセンターが行った FD・SD 活動として、もう一つ新たな取組があった。それは、大学コンソーシアム石川第 5 回 FD・SD 研修会「学習成果を重視した学士課程教育の構築に向けて～カリキュラムポリシー（CP）・ディプロマポリシー（DP）策定のためのフレームワークとは～」に、金沢大学大学教育開発・支援センターとともに共催したことである。筆者自身が大学コンソーシアム石川の FD 企画委員会副委員長の職にあり、同研修会の企画を行った。この研修会企画の背景には、本センターが検討していた大学院教育質保証のためのフレームワークとしての 4 つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、スーパービジョン・ポリシー、グラデュエーション・ポリシー）に貢献できるものという意図があった。

講師には、中央教育審議会大学分科会等で活躍のカリキュラム研究の第一人者である神戸大学大学教育推進機構 川嶋太津夫教授を迎えることできた。10 月 21 日（金）午後開催された大学コンソーシアム石川主催第 5 回 FD・SD 研修会には、テレビ会議システム利用等を含め、58 名の参加があった（以下の会場写真参照）。特に、本学において、関係者から同研修会に強い関心を示すレスポンスがあったこと、さらには、その後の本学でのポリシー策定の動きが実質化したこと（結果として、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーが 2012 年 3 月に策定する運びとなった）は、本共催イベントとしての大きな成果であった。なお、一方において、2008 年 12 月に中央教育審議会答申『学士課程教育の構築に向けて』が提示した 3 つのポリシー（アドミッションポリシー（AP）、カリキュラムポリシー（CP）、ディプロマポリシー（DP））の整備については、山口大学や愛媛大学が既に率先して策定し、実質化の取組を次々と進めていることを忘れてはならない。

講演途中では、授業設計に学生の意見をどれだけ取り入れるか、自分たちの授業内容が学生にどれだけの効果を与えているかなど、教員個々人の教育活動を改めて振り返る絶好の機会となった。

特に、日本の学生の学習時間の少なさや学部・学科での教育・学習目標が策定されている現状を踏まえながら、学部・学科の壁を超えた全学的な教学システムの構築の必要性のほか、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに加え、アセスメントポリシーの必要性が提案されたことは興味深いものであった。

本講演を通して、川嶋先生が一貫して主張されたかったことは、学習者（学生）中心の大学教育を目指すことが大事であり、具体的には、



学習者（学生）が自律的に学習活動を行い、アセスメントするような環境を促進する大学改革こそ必要であるという点にあったと思われる。そのためには、教える側の教員の視点を変えることが必要であるということが痛感された。

### 3 まとめ

大学院教育イニシアティブセンターでは、FD・SD活動として、全学FD・SDセミナーの企画実施を基本としながら、大学コンソーシアム石川や北陸地区での諸活動に範囲を拡大しつつある。大学院教育特有の課題も多い中で、組織的な教育改善や学生支援といった課題については、学士課程教育を含めて、他大学との情報交流や人的ネットワークを確保しておくことが非常に有意義であると感じている。今後ともこれらの諸活動を積極的に進めるとともに、本学に効果的にフィードバックできるような環境作りに尽力していきたい。

今後の全学FD・SD活動としては、教員・職員・学生が一体となって議論し合う機会を提供し、大学共創という概念を浸透させることが大きな目標である。一方において、専門分野としての研究科FDでは、本年3月策定のポリシーを基礎に、コースワークや研究室教育、さらには学位審査基準の実質化への取組に貢献できるような機会提供や各種支援を行っていくことが肝要であると考えられる。

最後に、本センターとして諸活動に取り組みための重要な指針として、筑波大・北海道大名誉教授の小笠原正明先生が「機関とディシプリンの葛藤をどう解決するか？－大学教育センターの役割－」（小笠原2011）と題して書かれた一節が参考となるので以下に紹介しておきたい。

- センターは大学において部局をまたがる教育のすべてを扱うところであり、研究部はその中で機関車としての役割を果たすべきだと考えたこと。
- センターにおける「研究」を総合的で実践的なものと捉えていたこと。理論と理念は必ず具体的な形となって表れるはずであり、そうなるのはじめて意味を持つ。

### 4 参考文献

中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて』

中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2012）「大学教育部会第10回資料3（参考資料）」

林 透（2011）「（2011年度第5回）FD・SD研修会を開催」『教育学術新聞』2011年11月23日3面

金沢大学大学教育開発・支援センター、富山大学大学教育支援センター、福井大学高等教育推進センター、

北陸先端科学技術大学院大学大学院教育イニシアティブセンター（2012）『大学共創プロジェクト2011報告書』

小笠原正明（2011）「機関とディシプリンの葛藤をどう解決するか？－大学教育センターの役割－」『全国大学教育研究センター等協議会ニュースレターNo.15』